

戦争の恐しさとは

八重瀬町立具志頭小学校六年 石塚 雪菜

私は、戦争を知らない。体験した事もない大切な人を失う苦しみも。でも、これだけは分かる。毎日が地獄のようだという事。八十一年前の今、空は、戦闘機で埋め尽くされ、海は、軍艦や遺体が浮き、屍の海のように、陸は、私達と同年の子が戦場にでて、関係のない人が巻き込まれて、誰もが怯えている。四年生のころ、授業で平和について学んだ。その時に、沖縄戦の事について、県外の方々に知らせていきたいと思い、平和について考えようと思った。そこで、母と一緒に平和祈念資料館に行った。そこには、いろんな人達の写真があった。一枚の写真を見た瞬間、胸が痛んだ。その写真には、壕の中で集団自決をした人々の写真があり、今じゃ考えられない光景に胸が痛んだのだ。学校に行って勉強ができ、友達と遊べて、家族とご飯が食べれるという当たり前の日常がどれほど幸せかを知った。私のおばちゃん、戦争体験者じゃないため、話は聞けない。でも、戦後の話は、おばあちゃんからよく聞いていた。当時は、食料も足りなく、米軍の収容所に入れられ、飢えと衛生環境の悪化に苦しんでいた。住宅や食料は全て破壊され、米軍による土地接收、つまり、ブルドーザーと銃剣により、こきょうを追われるなど、極限の貧困と軍政下での生活だった。ニュースで被爆者の話を聞き、その内容は、十十空襲の話で、その被爆者は、おさないところに母親を目の前で亡くしたという。その時の年れいは、小学一年生で、こんなおさないときに大切な人を亡くすというつらい体験をしたという。ほかにもつらい体験をした人は数えきれないほどいると思う。体験者のほとんどが戦争は、死ぬよりもつらくて地獄の

ようだと言っていた。なぜなら、親しい人や大切な人が目の前で亡くなり、食料もなく、希望もなく、逃げ惑う中で生存者が口にする地獄という表現は非常に多いからだ。空から降ってくるのは、雨ではなく爆弾。青ではなく血で赤く染まった海。絶望しかない中で生き残った被爆者は、本当に尊敬する。話を聞いて感じたことや、テレビを見て思ったことは、今までは、学校で平和学習を通して資料館などで勉強したけど、ニュースで体験者の話を聞いた時は、想像していたよりもずっと重くて、心に突き刺さるものだった。壕の中は、暗くて、じめじめしていて、食べ物も飲み物もない。そんな中でアメリカ軍の攻撃だけが頭をよぎる。みんな自分の事に必死で誰もほかの人を助けようとしめない。泣き声で見つかるのを恐れて、赤ちゃんを静かにさせればならなかったりしたという話を聞いて、とても心苦しくなった。この同じ沖縄で起きていたなんて信じられなかった。当時の子供達は、私達と同じくらいの年齢で、学校に行くこともできず逃げ回るだけで精一杯だったと聞いた。そこで、今の自分の生活は、とても恵まれていて、かけがえのない時間なんだなと気づいた。そして、一日一日を元気に過ごせていることに感謝して、まわりの家族、友達、先生などそばで支えてくれる人を大切にしていこうと思う。今の世代の人達は、戦争を体験したことがないので、戦争の恐ろしさを知らない。もちろん私もだ。戦争を他人事として考えないで、自分事として捉えていこうと思う。そして、沖縄戦の歴史や事実を学ぶと共に、今の生活と結びつけるなど工夫して考えてもらえたらいいと思う。戦争に関する本など身近な事から身につけることも一つの考えだろう。戦後八十一年という長い年月が流れてもこの沖縄で起きた戦争の悲さんさを決断してわすれず平和を願い続けていこうと思う。